

第4回里山フェスティバル「里山シンポジウム」

「美しい森林（もり）づくり推進国民運動」の全国キャラバン

福井 照 氏（農林水産大臣政務官）

ご挨拶

皆さんこんにちは。

ただいま、ご紹介いただきました農林水産大臣政務官の福井でございます。元は政務次官と言っていましたけれど、今は、副大臣と政務官に分かれております。農林水産大臣は皆様ご存知のように松岡大臣でございます。



実は先週から「美しい森林（もり）づくり推進国民運動」全国キャラバンというキャンペーンを農林水産省で始めておりまして、その第2週目ということでこの里山シンポジウムにお邪魔させていただきました。

安倍総理の「美しい国づくり」は、何よりも「美しい森林（もり）づくり」からということで、農林水産省一生懸命考えまして、昨年も補正を含め、暮れに数百億円の予算の分捕り合戦をしましたが、そのほとんどを農林水産省がいただき、765億円というお金を間伐に使うということになりました。まさに、ターニングポイント、ポリシーが変わってきました。農林水産省も間伐こそ日本で農林水産行政として本当に根幹としてやるべきことだとい

う風に思い定めたということでございます。これは地球環境問題で3.8パーセントのCO2を吸収しなければならないということだけではなくて、この日本民族の暮らし方、生き様、これからの日本の行く末を左右するからだというところでございます。

それで、今日この「里山シンポジウム」にどうしても来たかったのでございます。というのは、今日はだいぶ知的レベルが高そうな人が多いので、ちょっと知的レベルを高めてお話をさせていただきます。

実は世界を覆う政治思想が今、まさに転回点を迎えております。アングロサクソンのネオリベリズムといいまして、もともと世界は自由と平等をわざわざ対立軸にして、振り子時計の振り子のように自由100パーセントのときと、平等100パーセントのときと、自由と平等を引力と斥力にして、まるでモーターのように時代を進めていくことを繰り返してきたわけでありまして。

この20年ぐらいはサッチャー、レーガンから始まって、ネオリベリズム。もう、まさに自由100パーセント、小さな政府が善である。規制緩和が善である。そして、その市場原理路線ということで、竹中、小泉路線でこの7~8年余りやってきましたから、もうそろそろ平等に振り子を戻さなければいけない。その平等の行き先はまさにこの日本人の農耕民族としての村落共同体、この「里山となりわい」も、まさに今日ご議論していただくそのものズバリなんでございます。これはもう日本人しかできません。日本人だけができうる。この暮らし方、哲学、思想なのでございます。

それが証拠に、柳田国男という民俗学者がおりまして、農林省の役人でありましたが、インハウス・エンジニアで、民俗学者としてしか、有名でないのですけれども、まさに、政治思想、日本の思想家の金字塔でございました。それが農林省の元役人であったわけでありまして。たとえばその人が、昭和21年に予言したことは、農地解放で庄屋がいなくなると徳目をずっと伝える人がいなくなるから、日本人の心のあるいは社会全体が解けてなくなってしまうということ、実は予言していたのです。予言してまさに今ズバリで、子殺し、親殺し、いじめ、この社会問題に目を、耳を覆いたくなるような問題が起きているわけで、親学とか、この教育再生と言われているのはまさに、この徳目をお爺さんからその親へ、その親が子供へと伝える人、その地域地域で伝える人がなくなったから、その装置としてのまさにノブリス・オブリージュが居なくなったからということ、昭和21年に予言した人が農林省の役人であったのです。

また、二宮尊徳も思想家でございました。二宮尊徳の教えを教えている大日本報徳社という、学校の門柱には

二つあって、右の門は「道徳門」といい、左の門は「経済門」と書いてある。「道徳なき経済は犯罪である。」とは誰でもいえますが、「経済なき道徳は寝言である。」。つまり、儲けなければならない。しかし、道徳も 50 パーセント、経済も 50 パーセントというまさに実践農耕民族としての村落共同体の生き様、生き方を二宮尊徳がずっと教えてきた。これを日本民族の農耕民族としての村落共同体の生き方ではなからうか。ということで、今日「里山となりわい」でももちろんその経済をすべて忘れたなりわいではなく、経済も考えていた。食品リサイクルすべてでございます。

先ほども間伐や照葉樹林を植えている NPO を激励させていただいたわけでありますけれども、やっぱり最終的にはビジネスとしてのチェーンがなければならない。まさにそういうことでございます。世界中でアングロサクソンが設計をしましたので、日本人しか世界に文化として発信できないということであります。日本人が世界にやるべきことは、経済的貢献でもひとつ、それは X 軸、しかし Y 軸として農耕民族として村落共同体みんなと一緒に平等に幸せになろうという生き様を実践して、世界にお示しをするということこそ日本人がこれから国際社会としてやるべき仕事ではないかと思えます。

一つ、例を示して話を終わらしていただきたいのですが、ちょうど手話で「幸せ」ということを、日本語では顎をこうやって撫でて「幸せ」と耳が聞こえない同士の方々がコミュニケーションを表現します。この顎を撫でるということは日本人だけであり、普通のアングロサクソンのアメリカ人又はヨーロッパではハートを片手あるいは両手で押さえて、「アー幸せ」ということを手話で表現します。日本人は、顎を撫でる。これには語源がありまして、語源は東アジア、特に中国の古老が長いあごひげをこうやって撫でているというこの動作が語源なんです。手話で語源ということもおかしいですけども長いあごひげをゆっくり撫でている動作が語源であります。

つまりどういうことかということ、村長が目の前に展開してくる村人が時には喧嘩しながらでも同じように平等そして助け合い、慈しみあって幸せになっているということを見て、初めて村長さんも幸せだなど、ヨッシャ、ヨッシャと思うという、この崇高なる日本人の心の性を手話がまた示しているわけです。これこそ、日本人だということを是非自慢にして誇りにして、今日シンポジウムでご議論していただければ、この「美しい森林（もり）づくり推進国民運動」全国キャラバンの第 2 週目ということで、皆さん方にこの運動に参加していただくことで、誠に私自身も誇りに思えます。

是非よろしくお願ひ申し上げまして、ご挨拶とさせていただきます。

本当にご苦勞様、ありがとうございました。